

五 大蔵大臣と貧乏くじ

大蔵大臣という言葉は、何かしら古典的な魅力と重さを感じる言葉である。明治維新から明治十八年までは大蔵大臣のことを大蔵卿といっていた。明治十八年内閣制度が新しく出来て、時の大蔵卿松方正義公が、初代の大蔵大臣に親任された。それから今日まで四十数人の大蔵大臣が、入れ替り、わが国の財政を担当してきたのである。

大蔵大臣は昔も今も内閣の重鎮である。副総理格のポストである。誰でも一度はやってみたいと思う魅力のある役柄である。国の財政の元締であり、事実上財界を支配する絶大なる権力を掌握し、同時に国民の生業や生活に至大なる支配力をもっている公職である。

仮に大蔵大臣に人を得ず、勝手気儘にこの絶大なる権力を行使されたとしたならば、国民としてはまことにたまったものではない。苟も、近代国家の財政である以上一応、憲法、予算、財政法その他の財政金融法令によつて、大蔵大臣の権限が濫用されないように規制されている。国権の最高機関である国会の監督も勿論うけてはいる。それにしても、大蔵大臣に任せられた権限

は、非常に大きいわけである。予算の実行、税法の執行、国家資金の運用、金融調整の実施、貨幣法の運用、国有財産の処分その他数えれば限りがないが、こういう重い行政に対する最終的の決定権をもっているわけだから、蓋し、その権力は絶大なものである。

しかし、それだからといって国民は別段心配する必要はない。大蔵大臣は、自ら進んで自分の権力を行使するようなことは殆んどないからである。大蔵大臣のやる仕事は、大抵の場合、受身であるか、あるいは他人のやったことに対する後始末であるか、どちらかである。積極的、能動的に権力を行使することは稀である。彼は進んで金を出すようなことは殆んどないのである。天災地変が起つた場合には、逸早く、その復旧費の要求を受ける。財界に恐慌が起つた場合には、先ず第一にその善処を責められる。貿易の不振、物価の騰貴、生活の困窮、財界の不況、失業の増加等、凡ゆる問題が持ち上れば、結局大蔵大臣に対してこれを何とかしろといつて国民から迫り立てられる。そうかといえば、結核の増加、教育や文化施設の貧困は、大蔵大臣が財布の紐を締めすぎるからだといつて非難を浴びる。一方では、税金は重い、苛酷に過ぎるといふ苦情が大蔵大臣に集中する。つまり国家活動一般についての後始末役であり苦情承り役であるといつた恰好である。かくて、大蔵大臣は政府部内はもとより、国民一般からせき立てられて、これに消極的な抵抗を試みつつ、しぶしぶ金を小出ししているわけである。世の中に「貧乏くじをひく」と

という言葉があるが、まさに、これは大蔵大臣にあつらえ向の言葉であろう。従つて、大蔵大臣ぐらい本質的に評判の悪い役柄はない。しかし大蔵大臣が誤つて国民から氣受けがよいようになる国はもたない。

ところが、一旦腹を決めて、大蔵大臣がこうやるといえば、その通り金が出る。各省の大臣では、ああもしたい、こうもしたいということは出来ても、実弾が必ずこれに伴うわけではないから、その言葉は結局空念仏になり勝ちであり、世間も又それを信用しない憾みがある。大蔵大臣には、空念仏ということはない。それだけに彼のいうことには権威があり、決定力があるわけである。いわば、彼の権力は消極的ではあるが強いのである。又彼の意見は、財政を通じて国政全般の見透しと均衡の上に立つた全面的な判断になるのである。局部の利害に関連する主張は、一見具体的で強いように見えるが、害は実践性に乏しい概念論になる虞れがある。判断は全局的であつてはじめて実践的になるものであるから、大蔵大臣の主張は強く且つ実践的であるわけである。

財 政 断 想

大蔵大臣のところには、お金がいくらでもあるから、さぞ難儀はないだろうとよくいわれる。ところが大蔵大臣ぐらい金に恵まれないポストはないわけである。大蔵省が贅沢をすれば各省がそれに便乗する恐れがあるというので、先ずもつて自肅しなければならぬ。昭和二十年、私は

津島蔵相に随行して伊勢神宮に参拝した。偶々下村陸相と神宮で落ち合った。秘書官同士で幣帛料を打合せたところ、陸軍では二百円と決っていて、しかもそれが役所から出るという。大蔵省では百円と決まっていて、大臣のポケットマネーから捻出することになっている。このように他の省では機密費や接待費が潤沢であったが、大蔵省は遠慮するという始末である。又金融機関はもとより凡ゆる民間事業で、彼の権限に接触していかないものはないから、彼は身を持つことに厳正でなければならぬ。一言半句もゆるがせにしてはならない。金に一番縁のある公職をけがして、しかも金を身につけることが出来ない役目である。換言すれば、金に一番縁のある公職をけがしているから、自らの金には不自由をする役柄だという方が適切であろう。妙な譬えではあるが大蔵大臣というのは、産婦人科のお医者さんのような役柄である。

大蔵大臣は又非常に忙しい。大臣の主要な仕事の一つは毎週二回の閣議であるが、この閣議に提案審議される案件で大蔵大臣の仕事に関係のないものは一つもないといつても差支えない。だから、彼は、他の所管大臣全部を併せた程の勉強をしなければならぬ。又一つの省への陳情は、殆んど自動的に大蔵省にやってくる。従つて彼は他の大臣に数倍する程の訪客と面接しなければならぬ。国会の委員会は、各委員会とも大臣の出席を要求してくる。他の所管大臣であれば一つか二つ、せいぜい三つの委員会程度に出席すれば足りるが、大蔵大臣は、予算委員会と大蔵委

員会との立役者であるばかりでなく、一切の委員会から呼出を受けるのである。体がいくらあっても足りない始末である。

大蔵大臣の仕事は、たしかに多方面にわたっているが、つまるところ、お金の価値を維持するということが、その心樺になっている。私は政治のうちで何が一番大切なことであるかと聞かれたら、即座に、「それは貨幣の価値を維持することです」と答えるであろう。一国の政治や経済はもとより、更に進んで国民の生活や思想を安定させるかさせないかの一番大きい支柱は、何といてもお金の値打が安定するかしないかにかかっていると、いっても過言ではない。今日の世の中の秩序を維持している柱は貨幣の価値である。一旦この貨幣価値が崩れはじめると、経済の秩序は安定を失い、国民は血眼になって利を漁ったり、保身に浮身をやつすことになる。国民の道義もまた弛緩して、正直者が馬鹿を見ることになる。このことはひどいインフレの下で、われわれがいやという程見せつけられた現象である。インフレという病気は、戦争の災禍以上に、国民をむしばむパチルスであるわけだ。大蔵大臣が、寝ても醒めても、念頭を去らない関心をもって、いるのは、一にこの貨幣価値の安定ということである。これは重い責任である。遠い射程をもった広い大きい責任である。

かように大蔵大臣は、重い責任、厳粛な使命を担った役目であって、しかも自ら享受すること

の乏しい役柄である。誰も自ら進んで引受けてよいような生易しい仕事ではない。出来得べくんば、お断りしたいポストであろう。又進んでやってみたいという人にはやってもらいたくない仕事であり、どうしても嫌だという人こそ、三顧の礼を以てこの公職に迎えなければならぬ重職であるといえよう。(昭、二八・八)

六 「省」という字

太平洋戦争も末期に近づいた頃のことであつた。ある日、安岡正篤先生が大蔵省にお見えになつて一場の講演を試みられた。そのお話の内容は今となつては忘れてしまつてゐるが、何でも大蔵省の省という字には「省みる」という意味と「省く」という意味と二つの意味があるということとをいわれ、特に「省く」という意味がわれわれにとって大切なのだということを強調されたことだけは、不思議にも私の心に刻みこまれてゐる。

論語の学而第一の編に、「曾子曰吾日三省吾身為人計而不忠乎与朋友交而不信乎伝不習乎」とある。簡野道明先生の直解には「曾子曰ふ、吾は平生日己の身を再三反復して省察検討する所

あり、それは他人の爲めに謀慮することは、兎角疎略に流れ勝ちのものなるが、吾は果して人より相談を受けし事に対して、不親切にして真心の十分に尽さざる所はなかりしかと、又朋友と交りて、言語の間に誠信ならざりしことはなかりしかと。又師より学びたる事の未だ習熟せざるに、之を他人に伝授せしことはなかりしかと。かく反省して若し少しにても忠信の道に欠く所あらば、速かに之を改めなければ更に奮励して、道に進まんことを心掛くるなりと。ある。

これは何も役人たる人間に対するお諭しではなく人間一般に対する教えであるが、役人にとっては特に大切な注言ではなからうか。商人であればその商況の繁栄を招くためには、利害得失の上からも自分のやり口を絶えず反省しなければならぬわけである。ところが役人というのはたとえ横柄に構えていても、過ちさえなければそれがために月給が下がるわけでもない。換言すれば直接自分が痛い目にあうわけではない。又その結果が会社の考課状のように数字の上にはつきりと現われてくることもない。だからといって役人に反省が必要でないというわけのものではなからう。

元来役人というのは、今井一男氏の定義によれば「権力に値する実力なくして、その権力をいなくよくなった者」というわけだが、そうしてみると役人は一般の人よりも自分の言動についてもっと深い反省が要るものである。ましてその言動の及ぶ射程と効果が、役人が想像する以上

に広く且つ深いものがあることにおいておやである。

役人に責任がないというのであれば、これほどいい商売はない。「すまじきものは宮仕え」といわれているが、これは月給が少いから役人はつまらない等という意味ではなく、むしろ根本において役人の責任の厳肅さを歎じたものである。そして役人の深い反省に根底を発する厳肅なる責任感がないところに、財政の確立はないのである。財政の確立は単に理財の巧拙からでき上るものでは決してないのである。近頃、役人とか議員とかいう種類の人間は、雑務に追われて本に反省の余裕に乏しい。由々しいことである。恐ろしいことである。

ところが、もう一つの「省」くという心術が役人に根本的に大切であることをつくづく考えさせられる。同じ安岡正篤先生も「試みに論語開卷第一の四章目を持たして、曾子曰吾日三省吾身を読ませると、必ず吾れ日に三たび吾が身をかえりみると読んで、それ以上をあまり考えない。然し「省」の字は「かえりみる」と同時に「はぶく」である。この省くことが「省みる」と同時に大切であつて、道義も政治も結果は省かねばならぬ。人間は自然の理で、いつのまにか煩惱になるから、それをかえりみて、雑念、雑想、雑事をはぶいてゆくのが道義である。政治も又然り。簡易清論が要旨である。御無事であつてめでたいのである。故に官庁を××省、というではないか。現代の一病弊は煩冗ということである。あまり事が煩わしすぎ、刺激が多すぎる。欲が多すぎる。

心が乱れすぎる。故に現代人ほど「忙人」はない。この忙は畢竟何になるか。省みれば茫々漠々として真に愚昧である。有権の力は三省より湧く。我々は出来るだけ心頭を省し、身辺雑事を省き、綽々たる余裕を以て如何なる事変にも毅然として処してゆけるだけの心身を造って置かねばならぬ」といわれている（危機教話）。

私は更に、この「はぶく」という心の手術が財政の刷新にとって何よりも大切であると思う。われわれの毎日の営みは、何と雑想と雑念と雑事の波に追われ圧倒されていることであろう。陳情と文書の氾濫、請願と献策の堆積、視察と調査の繁昌、冗員と空疎な議論の過多、これがまのあたりにみる政治の横顔である。これでは疲れてしまふ。疲れるばかりが大変な冗費を費すことになるわけである。又余り豊かな政治の結実を見ることが出来なくなるのである。蒙古の名相が「百利を興すよりも一害を除くに如かず」と喝破したのは有名な話であるが、今日の日本の現実に照して、この一語ほど心を射るものはない。（昭、二八・八）